

**実務とアカデミズムの両立  
アメリカ留学で修得した  
正統派アカデミズムに  
企業法務の経験をブレンド  
させて、中大の「実学」を  
実践・指導**

平野晋先生の略歴を見ると、通常の大学教授とは異なっている。晋先生は、学部卒業後、企業に就職して法務を経験。企業派遣留学でアイビー・リーグ校（米国一流大学）の修士号を取得し、アメリカ法曹（弁護士）資格も取得。帰国後も企業法務を経験し、39歳の若さでNTTドコモ本社の法務室長になったのに、43歳で母校の教授に転身している。留学で極めたアカデミズムと企業内弁護士としての経験を、晋先生は教育にどのように活かしているのだろうか。

「ススム」は、どうしてNTTドコモの法務室長を辞めて、中央大学の教授になったのですか？」

「め、教授に転身したのか？——実はこの類の質問は、総合政策学部の新入ゼミ生たちからも毎年のように尋ねられるという。そこで、先生からうかがった回答を記しておこう。

**母校に戻って、後輩育成  
に後半生を捧げたい。**

平野晋教授がアメリカ名門アイビー・リーグ校の一つ、コーネル大学（NY州）の法科大学院でR教授からこう質問されたのは、2011年の秋。同大学院で在外研究中に特別講義を終えた晋先生を歓迎してくれる、夕食会の席上のできごとだった。ワインも入って気持ちも和らいだR教授は、晋先生の経歴を珍しく思ったらしい。なぜ役員の席に手が届くところにいたNTTドコモを辞

「是非、総合政策学部の専任教授になって欲しい。」：晋先生はNTTドコモの法務室長職で多忙な時期に、総合政策学部を創設した教授たち数人から突然、要請を受けた。もともと既に先生は学部創設以来、恩師

でもある創設者の要請を受けて、（ウィークデイには法務をこなしながらも）、毎週土曜日に非常勤講師として授業を担当していらした。しかし、実務をあきらめて、教育と研究に専念することには、まったくこれまでと違う意味がある。まず（失礼だが）年収が下がる。これは実際に重要な問題である。さらに、日々直面する大きな法律問題の解決策を探るといって、エクセレント・カンパニーにいるからこそ味わえるスリルから遠ざかる不安もあったという。最近では企業や官庁を定年退職してから教授に転身する方々も居られるから、それでも良いのではない

**人は、豹変する。**

「正直言って僕は、中大の学生時代、遊んでばかりで、ローラースケートの愛好会をつくって、試験前以外はほとんど勉強しませんでした。」：

これは学生にあまり言いたくないのですが（笑）、とおっしゃる晋先生。そんな先生が豹変したのは、社会人になってからだ。「みんな就職活動をするので僕も一応やってみようと思ったのです。もし良い内定がなかったら司法試験の勉強でもやろうかな、なあって甘い気持ちでした。」：ところが晋先生は、重工業系の会社に内定が決まり、そのまま国際部門に配属。そこで企業法務（後の法規部）の仕事にたずさわる。しかし

国際法務は、遊んで暮らしてきた新卒に務まるほどに甘くはない。毎日、アメリカ子会社の社内弁護士（もちろんアメリカ人）とファクシミリでのやりとり。さらに米国出張、国際訴訟の管理、涉外契約交渉など。「英語のできる人が出世して、できない人は落伍する。そんな人事方針の中、僕は毎日、仕事以外は英語の勉強に没頭しましたよ。」：このとき初めて、晋先生は自ら進んで勉強する態度を身につけたという。

勉強の結果、英検1級の試験に合格。英語力の向上を資格取得で実証した晋先生を、会社は放っておかなかった。上司が晋先生のために企業派遣留学制度を創設してくれた、その一期生となった先生だが、留学先の大学院には、自力で合格しなければならぬ。そして企業派遣一週生としての重圧は、入試の失敗を許さない。そこで一気に勉強を加速させた晋先生は、みごと、アイビー・リーグ校のコーネル大学法科大学院に合格する。

その後も晋先生の勉強人生は続いた。法科大学院での予習・復習と試験。修士課程修了と修士号取得。アメリカの法曹資格試験の受験・合格。それぞれ一度の挑戦でクリアし、留学の一年間をぶじ終えた。

そして晋先生は、留学二年目を迎えてさらなる研鑽を目指すことになる。「会社は留学期間として二年間も与えてくれたのですが、一年で初期の目的を達成したので、次は『ロー・ジャーナル』という論文編集団体への入室に挑戦してみました。」ロー・ジャーナルとは、成績優秀なアメリカ

カ人学生だけが入室を許される学術団体。たとえばオバマ大統領も法科大学院時代には、ロー・ジャーナルのメンバーだったことは有名である。そのメンバーだった履歴は賞罰欄の「賞」に記載できる名誉で、就活上も有利になる（一流の巨大法律事務所への就職につながる）。だから卒業後の就職口を探さなければならぬアメリカ人学生たちは、競ってロー・ジャーナル入室を目指して猛勉強する。「それまで日本人はおそらくまだ誰も、入室を許されなかったようです。しかし規則が改正されて受験の機会を留学生にも与えることになったので、受験してみたのです。」そして入室を許された晋先生は、名誉以上の経験をここで得られたという。

**論文を書くことが、  
趣味になる!?**

ロー・ジャーナルのメンバーになると、主に二つの仕事をこなさねばならない。一つは、教授たちが書いた論文の編集や校正作業。アメリカ



平野 晋（ひらの すずむ）  
埼玉県出身。1984年 中央大学法学部法律学科卒業。1990年コーネル大学大学院（ロースクール）修士課程修了（法学修士）。同年米国（NY州）法曹資格試験受験・合格（翌年以降現在までNY州弁護士登録）。1991年コーネル大学ロースクール特別生、「コーネル国際ロー・ジャーナル」誌編集委員。2000年（株）NTTドコモ法務室長。2004年より中央大学教授。2007年 博士（総合政策・中央大学）。専門分野は法律。著作は『アメリカ不法行為法』（中央大学出版部）等多数。最新刊は、監訳『法と文学』（上）（下）（木鐸社）



在外研究中の晋先生と、共同研究者 J.A. ヘンダーソン、Jr. 教授（「製造物責任法」の全米一の権威）



在外研究中の晋先生のコーネル大学研究室（中大の旗が掲げられている！）



晋先生の著書の一つ。アメリカ契約法のアカデミズムと実務を統合させた、日本初の本格的体系書



コーネル大学法科大学院の壁には、各年度のロー・ジャーナル編集部員の集合写真が誇らしげに掲げられている（この写真の中に、晋先生が写っている!!）

人教授の原稿を日本人の晋先生が校正するというのも大胆な話であるが、先生はこれもこなされた。そして二つ目の仕事は、自らも学術論文を執筆すること。これが審査を経た上でみごとに合格すれば、ロー・ジャーナル（学術雑誌）に掲載される。掲載されれば、それも履歴の賞罰欄の「賞」に特筆されるほどの名誉。就活をしなければならぬアメリカ人学生にとつては、さらにワンランク上の働き口が保証される。「だからみんな、より良い論文を執筆しよう」と切磋琢磨するので、質の良い論文が生まれるのです。」

以上の二つの仕事をこなすと、論

文の書き方がみっちりたたき込まれる。文献を調べてウラを取る（出典を確認する）。逆にいえばウラの取れないこと（出典のない事柄）は原則として論文に書いてはならない。：判例法主義と呼ばれる、先例が厳格に守られるコモン・ローならではの論文の書き方を修得するのである。教授や、裁判官や、一流巨大法律事務所の弁護士たちのような、（あるいは現大統領も?!）、アメリカ法曹界の頂点に登りつめた人々は、みなほぼ全員がロー・ジャーナル出身者である。だからこの厳格な論文執筆の流儀を、アメリカ法を担う法曹のトップ・エリートたちは脈々と維持・継承している。そんな経験を得られた晋先生。ロー・ジャーナルの仕事は非常に大変だったそうだが、不思議なことに論文を書くことが最後には好きになったという。「結局、僕の論文が審査を合格して、ロー・ジャーナルに掲載されました。これを日本語で掲載してみないか、という日本の法律雑誌からのオファーもきて、日本でも論文が連載されることに……。このようにして、

自分の書いたものが世に出るおもしろさを知ったのです。」これ以降、晋先生は、帰国後の企業法務の合間をぬって、論文や書籍を多産することになる。そして教授になった今でも、アメリカ法の正統的な論文執筆術を教育に活かし、ゼミ生を育てている。英吉利法律学校を創設した増島六一郎以来の中大コモン・ローの伝統を、新しい総合政策学部で引き継いでいらっしやるのである。

## NTTドコモ法務室長

### 時代の経験―

### 実務の醍醐味を教育に

### 活かすきっかけに。

帰国後、転職を経てNTTドコモの法務室長になった晋先生。そこでの実務経験も先生は今、大学教育で活かしているという。

たとえば「迷惑メール」問題。晋先生が法務室長時代に、突然、NTTドコモを襲った現象。それまでは世界でも、携帯電話の電子メール機

る、アメリカの財産法でしばしば用いる学説を、迷惑メールに援用した話をしているのです。一見すると難しそうに思える法学や経済学が、実は迷惑メールという日常の現象に関係している話をする、みんなにも興味を持ってもらえます。」

実務とアカデミズムの両立。晋先生が常日頃おっしゃられる教育方針が、迷惑メール規制のお話にもうかがわれる。

## 「そして後輩のみなさんも、豹変させたい」…

### 平野晋先生の教育方針。

最後に、晋先生から学生のみなさんへのメッセージをうかがった。「要するに、学生時代に遊んでいた人でも、きっかけさえあれば豹変して勉強するようになる。僕はそう確信しています。だけど社会人になってから豹変したのでは、本当は遅すぎる。僕はたまたまラッキーで、色々な人たちの支援を得ながら社会に出ても勉強できました。が、そう

能に向けた迷惑メールはまったく例がなかったという。「いやあ途方に暮れました。お客さんは文句を言うし、マスコミもNTTドコモをたたく。だけど当時の法律は、ドコモが勝手にメールを遮断してはいけないとも解釈できる。だから監督官庁も遮断を許すとは言えず、八方塞がり。しかも重役会議では、役員たちや副社長から法務室長が責められる。本当は法律の不備が問題なのに、法律を司る法務室長が悪いという雰囲気になってしまつて、困りました。」

そこで晋先生は、社長とも戦略を練つて、迷惑メール業者に対し戦略的訴訟を仕掛ける。訴訟で得られた、規制を許す司法判断も大々的に記者会見・広報した。迷惑メール規制立法の必要性を、マスコミに理解させるのが目的だった。アメリカでは既に多くの州で規制されているという事実も、徹底的に調べて上げて広報した。すると、それまでドコモをたたいていたマスコミの論調が急変。当初の目的通り、規制立法すべしという世論も高まつたので、今度は間髪を入れずに議員立法を働き掛けた。

なれるか否かは運次第というのではつまらない。中大の後輩の学生諸君には、僕のように怠けることなく、学生時代のうちに豹変して欲しいし、豹変させたい。目から鱗が落ちるような発見を、勉強を通じて体験して欲しい。たとえば迷惑メールの話だって、僕は実務でめずらしい経験をしました。みなさんには授業でこれを体験して欲しい。僕はいつもそういう気持ちで、授業やゼミをやっています。」

こう語る平野晋先生の教育方針の根底にあるのは、先生ご自身の人生体験のようである。

「企業法務の経験と、留学・論文執筆を通じて得てきたアカデミックなノウハウ。この二本柱を学生にも伝えたい。実務とアカデミズムの両立こそが、「異色」と言われる僕の存在意義だと思うし、「実学」を目指す中央大学建学の精神にもかかなうと思う。そして実務とアカデミズムの両立が為されれば、後輩のみなさんが社会で強く生きていけるだけではなく、より良い社会造りにも貢献してもらえると信じているので。」